第17回　歴史リレー講座「仏教の伝来と聖徳太子」　西山　厚氏（H28.2.21）

仏教が朝鮮半島の百済から日本に伝来したということをご存じの方は多いでしょう。しかし、その詳しい年代、理由、その頃の日本と百済の状況、具体的には何が伝えられたのか、そしてその後日本はどのような道をたどったのか…。これらの問いには大人でも案外スラスラと答えられないものです。

仏教は4世紀から5世紀前半にかけて、まず中国から朝鮮半島の高句麗、百済、新羅の国々へ伝わりました。その後の日本への伝来年は諸説あります。『日本書記』には552年、『元興寺縁起』には538年と記載されていますが、百済側の記録によると聖明王26年（549年）で、正確な年は結局のところよくわかりません。伝来の大きな理由としては、百済が高句麗や新羅との戦いで国家存亡の危機を迎えた際に日本から受けた援助に対する見返りと考えて間違いなさそうです。

その頃の日本は欽明天皇の時代。伝来の際、聖明王から天皇に仏像と経典が贈られました。仏教の教えに触れた天皇は感激しますが、導入を決断できずに豪族に意見を求めました。蘇我稲目は「ほかの国々が信仰しているのに日本だけが取り入れないわけにいかない」と賛成しますが、物部氏と中臣氏は「外国の神を入れては八百万の神が怒る」と反対。双方の顔を立てたい天皇は稲目に仏像を祀らせる一方で、物部氏らには仏教を受け入れないと宣言します。その後全国的に疫病がはやるやいなや、物部氏たちは天皇のもとに駆けつけ仏像の処分を直訴。稲目から仏像を奪い、難波（なにわ）の堀江に流してしまいました。

それから30数年後の敏達天皇の時代、稲目の宿望を受け継いだ息子の馬子が仏像を手に入れ、11歳の少女（のちの善信尼）ら3人の女性を出家させました。こうして仏像と経典に加えて僧が揃い、馬子が自宅に仏殿を作った時点が日本仏教の始まりとされます。

ここからは聖徳太子と法隆寺に関わる疑問をひもといていきましょう。法隆寺は607年ごろ、太子と推古天皇が用明天皇（太子の父）の病気平癒を祈って建立しました。670年、若草伽藍（もとの法隆寺）が焼失したのに、納められていたはずの釈迦三尊像が焼け跡もなく残っているのはなぜでしょうか。実はこれらの像は太子の病気平癒を願って造られたもので、太子の死後に完成したため別の建物で保管されていました。若草伽藍はその後に焼失したため難を逃れたのでしょう。そして太子と、蘇我入鹿に皆殺しにされた太子一族の冥福を祈るためにこれらの像を納める寺として新たに建立されたのが現在の法隆寺です。本尊の釈迦如来像はすなわち聖徳太子像でもあります。その法隆寺五重塔の芯柱に約100年も前の古い木が使われているのはなぜでしょうか。もともと太子が柱一本だけを建てており、せっかくだからと柱を活かして五重塔を再建したと考えられます。また、奈良時代に造られた夢殿に安置されている飛鳥時代の救世観音像は聖徳太子と同じ身長です。平安時代に造られた聖徳太子像もX線撮影によると、その体内に観音像が納められていることがわかります。釈迦如来である聖徳太子は同時に観音菩薩でもあるのです。

最後に『法華義疏（ほっけぎしょ）』（法華経の注釈書）が太子の手によるものか、それとも中国から入ってきたものか、さらには聖徳太子は実在したのか？という論争があります。これについては、奈良時代以前、『法華義疏』がある場所で展示された際に添えられた「これは大和の国の聖徳太子の書いた本である」と記された世界最古の解説文書が決着の決め手になります。緻密な推敲や独自の解釈が加えられている点においても『法華義疏』が中国のものである可能性はほぼゼロで、当時の日本でこのような文章を書けた人物は聖徳太子以外にありえません。この書は太子が606年に岡本宮で『法華経』を講説した際に使われた資料だと思われます。現在の法起寺はもとは岡本宮と呼ばれていました。ですから『法華義疏』が展示された場所は法起寺だったと考えられます。また、太子の真筆が残っているからには、一部の人たちが唱える「聖徳太子は実在しなかった」という説は当然成り立ちません。

歴史リレー講座「大和の古都はじめ」　第１７回

仏教の伝来と聖徳太子

西山　厚　2016.02.21

日本には百済から仏教が伝えられた。

それはいつなのか。
そのころ日本はどのような状況だったのか。
そのころ百済はどのような状況だったのか。
なぜ百済は日本に仏教を伝えたのか。
仏教を伝えるとは具体的には何を伝えるのか。
仏教が伝えられて日本はどうなったのか。

高句麗　372 年　前秦王の苻堅が使者と僧順道を遣わし、仏像と経典を伝える。
百済　　384 年　東晋から西域僧の摩羅難陀が来る。翌年、寺を建立。／斉、梁
新羅　　5c 前半　高句麗から僧墨胡子が来る。　5c 後半　高句麗から僧阿道が来る。

百済
475　高句麗が都の漢山（ｿｳﾙ）を攻略し、蓋鹵王が敗死。
　　都を漢山（ｿｳﾙ）から熊津（公州）に遷す。
523　武寧王が亡くなる。 →聖明王（聖王）即位？
524　聖明王（聖王）即位？　←『梁書』百済伝による。
529　高句麗が来襲し、領土を奪われる。
538　都を熊津（公州）から泗沘（扶餘）に遷す。
546　欽明天皇、百済に馬 70 頭・船 10 隻を与える。
547　百済から救助の兵を乞う使者が日本に来る。
550　新羅が百済を攻めて 2 城を奪う。
552　新羅が百済を攻めて漢江全域を支配下に置く。
553　百済の使者が日本に来て援軍の派遣を要請する。
554　日本から兵士千人が百済へ渡る。
　　聖明王（聖王）、新羅の兵に捕えられ殺される。

日本書紀 552 年 と 元興寺縁起・上宮聖徳法王帝説 538 年
聖明王 26 年　548 年 or 549 年

欽明天皇→敏達天皇→用明天皇→崇峻天皇→推古天皇
蘇我稲目→馬子　　物部尾輿→守屋

善信尼　禅蔵尼　恵善尼

石川精舎　豊浦寺　法興寺（飛鳥寺）　法隆寺

聖徳太子（厩戸皇子）

冬十月に、百濟の聖明王、更の名は聖王。西部姫氏達率怒唎斯致契等を遣して、釋迦佛の金銅像一軀・幡蓋若干・經論若干卷を獻る。別に表して、流通し禮拜む功德を讃めて云さく、「是の法は諸の法の中に、最も殊勝れています。解り難く入り難し。周公・孔子も、尚し知りたまふこと能はず。此の法は能く量も無く邊も無き、福德果報を生し、乃至ち無上れたる菩提を成辨す。譬へば人の、隨意寶を懷きて、用べき所に逐ひて、盡に情の依なるが如く、此の妙法の寶も然なり。祈り願ふこと情の依にして、乏しき所無し。且夫れ遠くは天竺より、爰に三韓に洎るまでに、敎に依ひ奉け持ちて、尊び敬はずといふこと無し。是に由りて、百濟の王臣明、謹みて陪臣怒唎斯致契を遣して、帝國に傳へ奉りて、畿內に流通さむ。佛の、我が法は東に流らむ、と記へるを果すなり」とまうす。是の日に、天皇、聞し已りて、歡喜び踊躍りたまひて、使者に詔して云はく、「朕、昔より來、未だ曾て是の如く微妙しき法を聞くこと得ず。然れども朕、自ら決むまじ」とのたまふ。乃ち群臣に歷問ひて曰はく、「西蕃の獻れる佛の相貌端嚴し。全ら未だ曾て有ず。禮ふべきや不や」とのたまふ。蘇我大臣稻目宿禰奏して曰さく、「西蕃の諸國、一に皆禮ふ。豐秋日本、豈獨り背かむや」とまうす。物部大連尾輿・中臣連鎌子、同じく奏して曰さく、「我が國家の、天下に王とましますは、恆に天地社稷の百八十神を以て、春夏秋冬、祭拜りたまふことを事とす。方に今改めて蕃神を拜みたまはば、恐るらくは國神の怒を致したまはむ」とまうす。天皇曰はく、「情願ふ人稻目宿禰に付けて、試に禮ひ拜ましむべし」とのたまふ。大臣、跪きて受けたまはりて忻悅ぶ。小墾田の家に安置せまつる。勤に、世を出づる業を修めて因とす。向原の家を淨め捨ひて寺とす。後に、國に疫氣行りて、民夭殘を致す。久にして愈多し。治め療すこと能はず。物部大連尾輿・中臣連鎌子、同じく奏して曰さく、「昔日臣が計を須ゐたまはずして、斯の病死を致す。今遠からずして復らば、必ず當に慶有るべし。早く投げ棄てて、勤に後の福を求めたまへ」とまうす。天皇曰はく、「奏す依に」とのたまふ。有司、乃ち佛像を以て、難波の堀江に流し棄つ。復火を伽藍に縱く。燒き燼きて更餘無し。是に、天に風雲無くして、忽に大殿に災あり。

日本書紀	金光明最勝王経
①是法於二諸法中一、最為二殊勝一。難レ解難レ入。周公孔子、尚不レ能レ知。此法能生二無レ量無レ辺福徳果報一、乃至成二弁無上菩提一。 ②譬如下人懐二随意宝一、逐レ所レ須レ用、尽依上情、此妙法宝亦復然。祈願依レ情、無レ所レ乏。 ③天皇聞已、歓喜踊躍、詔二使者一云、朕従レ昔来、未二曾得下聞二如レ是微妙之法一。 ④相貌端厳。	①応二当至心聴一是金光明最勝王経一。於二諸経中一最為二殊勝一。難レ解難レ入。声聞独覚所レ不レ能レ知。此経能生二無レ量無レ辺福徳果報一。乃至成二弁無上菩提一。（巻一、如来寿量品） ②如下人室有二妙宝篋一。随レ所二受用一悉従上レ心。最勝経王亦復然。福徳随レ心無二所乏一。（巻六、四天王護国品） ③四天王聞二是頌一已。歓喜踊躍。白レ仏言。世尊。我従レ昔来、未二曾得レ聞二如レ是甚深微妙之法一。（同右） ④所受容貌悉端厳。（巻二、夢見金鼓懺悔品）

（小島憲之『上代日本文学と中国文学』上による）

大倭の国の仏法は、斯帰嶋の宮に天の下治しめしし天国案春岐広庭天皇の御世、蘇我大臣稲目宿禰の仕え奉る時、天の下治しめす七年、歳は戊午に次る十二月に、度り来たるより創まれり。百済国の聖明王の時、太子像幷びに灌仏の器一具、及び仏起を説ける書巻一篋を度して言さく、「当に聞く、仏法は既に是れ世間無上の法、其の国も亦た修行すべきなり」と。

夏五月の戊辰の朔に、河内國言さく、「泉郡の茅渟海の中に、梵音す。震響雷の聲の若し。光彩しく晃り曜くこと日の色の如し。天皇、心に異しびたまひて、溝邊直此に但に直とのみ曰ひて、名字を書かざることは、蓋し是傳へ寫して誤り失へるか。を遣して、海に入りて求訪めしむ。

是の時に、溝邊直、海に入りて、果して樟木の、海に浮びて玲瓏くを見つ。遂に取りて天皇に獻る。畫工に命して、佛像二軀を造らしめたまふ。今の吉野寺に、光を放ちます樟の像なり。

是歳、蘇我馬子宿禰、其の佛像二軀を請せて、鞍部村主司馬達等・池邊直氷田を遣して、四方に使して、修行者を訪ひ覓めしむ。是に、唯播磨國にして、僧還俗の者を得。名は高麗の惠便といふ。大臣、乃ち以て師にす。司馬達等の女嶋を度せしむ。善信尼と曰ふ。年十一歳。又、善信尼の弟子二人を度せしむ。其の一は、漢人夜菩が女豐女、名を禪藏尼と曰ふ。其の二は、錦織壺が女石女、名を惠善尼と曰ふ。壺、此をば都符と云ふ。馬子獨り佛法に依りて、三の尼を崇ち敬ぶ。乃ち三の尼を以て、氷田直と達等とに付けて、衣食を供らしむ。佛殿を宅の東の方に經營りて、彌勒の石像を安置せまつる。三の尼を屈請せ、大會の設齋す。此の時に、達等、佛の舍利を齋食の上に得たり。卽ち舍利を以て、馬子宿禰に獻る。馬子宿禰、試に舍利を以て、鐵の質の中に置きて、鐵の鎚を振ひて打つ。其の質と鎚と、悉に摧け壞れぬ。而れども舍利をば摧き毀らず。又、舍利を水に投る。舍利、心の所願の隨に、水に浮び沈む。是に由りて、馬子宿禰・池邊氷田・司馬達等、佛法を深信けて、修行すること懈らず。馬子宿禰、亦、石川の宅にして、佛殿を修治る。佛法の初、茲より作れり。

十四年の春二月の戊子の朔壬寅（十五日）に、蘇我大臣馬子宿禰、塔を大野丘の北に起てて、大會の設齋す。卽ち達等が前に獲たる舍利を以て、塔の柱頭に藏む。辛亥（二十四日）に、蘇我大臣、患疾す。卜者に問ふ。卜者對へて言はく、「父の時に祭りし佛神の心に祟れり」といふ。大臣、卽ち子弟を遣して、其の占狀を奏す。詔して曰はく、「卜者の言に依りて、父の神を祭ひ祠れ」とのたまふ。大臣、詔を奉りて、石像を禮び拜みて、壽命を延べたまへと乞ふ。是の時に、國に疫疾行りて、民死ぬる者衆し。

三月の丁巳の朔に、物部弓削守屋大連と、中臣勝海大夫と、奏して曰さく、「何故にか臣が言を用ゐ肯へたまはざる。考天皇より、陛下に及るまでに、疫疾流く行りて、國の民絶ゆべし。豈専蘇我臣が佛法を興し行ふに由れるに非ずや」とのたまふ。丙戌(三十日)に、物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、胡床に踞げ坐り。其の塔を斫り倒して、火を縱けて燔く。并て佛像と佛殿とを燒く。既にして燒く所の餘の佛像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。是の日に、雲無くして風ふき雨ふる。大連、被雨衣り。馬子宿禰と、從ひて行へる法の侶とを訶責めて、毀り辱むる心を生さしむ。乃ち佐伯造御室更の名は、於閭磯。を遣して、馬子宿禰の供る善信等の尼を喚ぶ。是に由りて、馬子宿禰、敢へて命に違はずして、惻愴き啼泣ちつつ、尼等を喚び出して、御室に付く。有司、便に尼等の三衣を奪ひて、禁錮へて、海石榴市の亭に楚撻ちき。

夏六月に、馬子宿禰、奏して曰さく、「臣の疾病りて、今に至るまでに愈えず。三寶の力を蒙らずは、救ひ治むべきこと難し」とまうす。是に、馬子宿禰に詔して曰はく、「汝獨り佛法を行ふべし。餘人を斷めよ」とのたまふ。乃ち三の尼を以て、馬子宿禰に還し付く。馬子宿禰、受けて歡悅ぶ。未曾有と嘆きて、三の尼を頂禮む。新に精舍を營りて、迎へ入れて供養ふ。或本に云はく、物部弓削守屋大連・大三輪逆君・中臣磐余連、俱に佛法を滅さむと謀りて、寺塔を燒き、并て佛像を棄てむとす。馬子宿禰、諍ひて從はずといふ。

（二十一日）
甲子に、善信阿尼等、大臣に謂りて曰はく、「出家の途は、戒むことを以て本とす。願はくは、百濟に向りて、戒むことの法を學ひ受けむ」といふ。
是の月に、百濟の調使來朝り。大臣、使人に謂りて曰はく、「此の尼等を率て、汝が國に將て渡りて、戒むことの法を學はしめよ。了りなむ時に發て遣せ」といふ。使人答へて曰はく、「臣等、蕃に歸りて、先づ國主に譖さむ。而る後に發て遣すとも、亦遲からじ」といふ。

是歲、百濟國、使幷て僧惠總・令斤・惠窟等を遣して、佛の舍利を獻る。百濟國、恩率首信・德率薑文・那率福富味身等を遣して、調進り、幷て佛の舍利、僧、聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等、寺工太良未太・文賈古子、鑪盤博士將德白昧淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・悛貴文・昔麻帝彌、畫工白加を獻る。蘇我馬子宿禰、百濟の僧等を請せて、戒むことを受くる法を問ふ。善信尼等を以て、百濟國の使恩率首信等に付けて、學問に發て遣す。飛鳥衣縫造が祖樹葉の家を壞ちて、始めて法興寺を作る。此の地を飛鳥の眞神原と名く。亦は飛鳥の苫田と名く。
是年、太歲戊申。

三年の春三月に、學問尼善信等、百濟より還りて、櫻井寺に住り。
冬十月に、山に入りて寺の材を取る。
是歲、度せる尼は、大伴狹手彥連が女善德・大伴狛の夫人・新羅媛善妙・百濟媛妙光、又漢人善聰・善通・妙德・法定照・善智聰・善智惠・善光等。鞍部司馬達等が子多須奈、同時に出家す。名けて德齊法師と曰ふ。

① 法隆寺は、いつ誰がなんのために建てたのか？

② なぜ、法隆寺は焼けたのに、釈迦三尊像などの古い仏像が残っているのか？

③ なぜ、法隆寺は場所を変えて再建されたのか？　誰が再建したのか？

④ なぜ、金堂と五重塔の建築様式がまるで違うのか？

⑤ なぜ、五重塔の心柱に、594 年頃に伐採された古い木が使われているのか？

⑥ なぜ、奈良時代にできた夢殿に、飛鳥時代の救世観音像が安置されているのか？

⑦ 「法華義疏」は、本当に聖徳太子が書いたものなのか？

⑧ 聖徳太子は本当にいたのか？

574　聖徳太子、誕生

593　聖徳太子、皇太子となる。

601　聖徳太子、斑鳩宮を造営。

605　聖徳太子、斑鳩宮に住する。

606　聖徳太子、岡本宮で『法華経』を講説する。

607　このころ、法隆寺が建立される。

622　聖徳太子、沒。

623　釈迦如来像が完成する。

643　斑鳩宮焼失。山背大兄王ら、法隆寺で自害。

648　食封 300 戸が法隆寺に施入される。

670　法隆寺、炎上。

693　持統天皇、仁王会に際して、法隆寺に天蓋などを納める。

694　持統天皇、法隆寺に『金光明経』を納める。

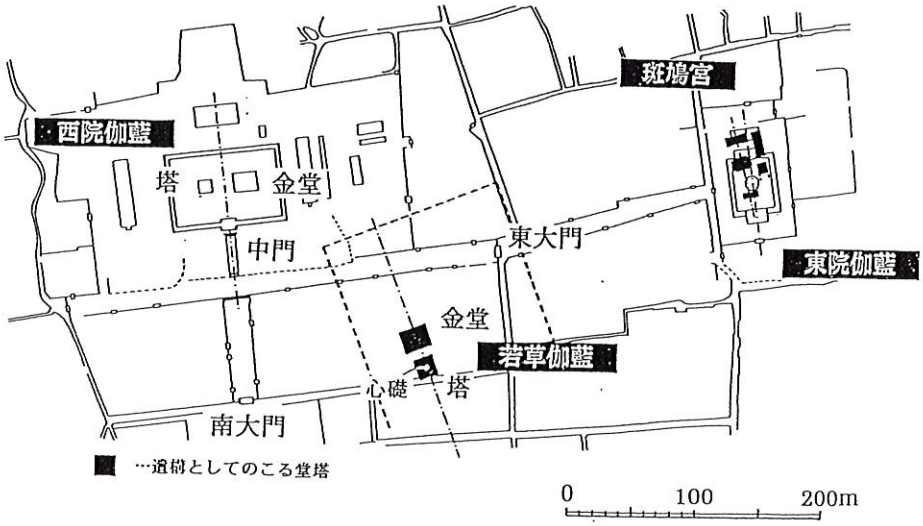
711　法隆寺五重塔の塑像や、中門の金剛力士像などが造立される。

720　『日本書紀』完成。

733～　光明皇后、数度にわたって法隆寺へ宝物等を寄進する。

739　行信、上宮王院（東院伽藍）を建立する。

606　秋七月に、天皇、皇太子を請せて、勝鬘經を講かしめたまふ。三日に説き竟へつ。是歳、皇太子、亦法華經を岡本宮に講く。天皇、大きに喜びて、播磨國の水田百町を皇太子に施りたまふ。因りて斑鳩寺に納れたまふ。

643　十一月の丙子の朔に、蘇我臣入鹿、小徳巨勢徳太臣・大仁土師婆婆連を遣りて、山背大兄王等を斑鳩に掩はしむ。巨勢徳太臣等、斑鳩宮を焼く。

670　夏四月の癸卯の朔壬申に、夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も餘ること無し。大雨ふり雷震る。